

中泊町豊岡は、岩木川下流に佇む水郷集落である。江戸中期、金木新田として拓かれ、村中を流れる鳥谷川とともに歩んできた。以下では、豊岡出身外崎令子氏の著書『ふり返れば懐かし』に導かれながら、水郷集

落の一年を辿ってみよう。春、地平線の上に浮かぶ岩木山の残雪が「馬」と「牛」の形になると田植である。苗を積んだ荷車が土埃舞う道を行き交い、畦道は紫や黄色のソドメ（アヤメ）が妖しく咲乱れる。



豊岡集落＝昭和30年代・塚本忠志さん撮影

集落近くの「家岸」の水田を終えると、次は「菴田」である。川舟に食料・蒲団を積み、鳥谷川を下り、岩木川河口に向かう。川で米を砥ぎ、泥にまみれた仕事着を洗う。夜はランプを灯し、吹き荒ぶ風音を枕に寝付く。粗末な出作小屋に寝泊まりしながらの田植作業は一週間に及ぶ。

夏、子供たちは、鳥谷川に架かる橋から飛び込み、ア

水郷豊岡の四季讃歌

斎藤 淳

(中泊町博物館館長)

ヒルや川藻と戯れながら、エビや雑魚取りに夢中になる。イトトンボやヤマダンブリが飛び交うなか、村の男たちは、川舟を横に流しながら、長柄の鎌で川藻の刈取作業（ゴモフキ）に精を出す。

宵闇の川面にホタルが瞬き、カエルの斉唱が始まるころ、村には糊付けした洗濯物を柔らかくするジヨウウバ打ちの槌音が響く。お盆

には、胡瓜や茄子で作った馬や牛を、蓮の葉の盆棚に供え、16日早朝鳥谷川に流す。線香の煙が漂うなか、川面にゆらゆらと幾つもの盆棚が流れ行く。

秋の早朝、朝靄のなか、鳥谷川に川舟が並ぶ。刈り取った稲は、舟で運ぶのである。舟尾に棹を立てて縄を絡げ、稲島を満載した舟を川岸から曳航する。上方に屈曲した橋を幾つか潜ると、船着場である。歩

み板を渡して稲島を降ろし、作業場に運び込む。これからが一仕事である。秋の夜、足踏み脱穀機の回転音は深更まで途切れることがない。

冬が訪れると、豊岡の景観は一変する。北西から吹き付ける雪は、防雪柵を通り越し、家と家の間に電線を跨げるほどの「ナガレ（吹溜り）」を作る。強風が吹き荒れる冬は、停電も頻発した。雪に閉ざされた暗闇に蝋燭が灯され、囲炉裏廻りでは昔話や謎々が交わされる。

吹雪が止むと、戸口の雪を掻き出し、窓にこびり付

いた着雪を払う。鈴を鳴らしながら馬櫃が往来し、辻では雪上に鮫や鱈を並べた即席の魚屋が開店する。買った人は尾ひれに絡げた荒縄で、雪道を引き摺りながら帰途に就く。排雪に覆われた鳥谷川の水面を見るのは、来春まで待たねばならない。

多くの水害をもたらした鳥谷川は、近代以降の岩木川改修工事や十三湖干拓建設工事などを経て、安全な川へと生まれ変わった。一方で、工事による流量や水位の低下、自動車の普及に起因する水運自体の衰退により、川舟は急速に姿を消していった。地域社会や自然も含めて、川を取り巻く環境も激変した。

近年の河川切替えや環境整備工事によって、川幅と道幅は逆転し、川岸まで水を湛えた悠久の流れは、近代的な排水堰へと変貌した。水郷だったことを物語るのには、一葉の写真と、人々の記憶だけである。